

地域に居場所を拓く

誰もがどんな状態になってもこの町で暮らす

2月には恵方巻、バレンタインギフトをご準備しました。ホワイトデー、卒園・卒業のお祝いギフトも準備致しますので、お気軽にお問い合わせください。

お申込み・お問い合わせは、☎ 0942-27-2039 まで



【自助】と【互助】の力を高めていきましょう さらなる地域貢献をめざして！

日本の現状は、2050年には、1人の若者が1人の高齢者を支えることとなります。その将来を担う子どもの現状は、6人に1人は貧困であり、過去最悪を更新し続けています。日本は超少子高齢化時代に入り、支援される人の急増と支援する人の不足について数多く論議され、高齢者の介護が今後の大きな問題のように思われがちですが、実は、将来を担う子どもの現状も日本にとって大きな問題です。

しかしながら、今後、日本の財政状況から、行政に「共助」「公助」の大幅な拡充を期待することは難しく、「自助」「互助」の果たす役割が大きくなることを意識した地域の取り組みが必要とされています。つまり、自分のことは自分で行い【自助】、子どもや高齢者、障がい者の誰もが地域の役割を担い、互いに声をかけあい、支え合える関係づくり【互助】に国の方向は動いているのです。

法人設立から15年。最初は共同体として、みんなで作り上げてきたものの、いつの間にか、「公助」に頼るようになっていました。しかし、今また「自助・互助」の力が必要な時代に入っています。昨年は、ポレポレの活動もすいぶん地域の方に助けていただきました。私たちも地域の皆さんに「ありがとう」といってもらえるような地域活動に積極的に取り組みたいと思います。例えば、災害時に地域の非常



健康教室も始めました！

事態を支えられるように、非常食や物品の数量全体を見直す予定です。

今後も、地域の子どもたちから高齢者まで、誰もがこの町であたりまえに暮らしていくために、さらに地域貢献できる法人にしていきたいと思います。

(本部長 北岡さとみ)

「あたりまえに地域で暮らす」の原点から、 暮らしの支援を考えよう！

超少子高齢化社会になり、支援される人の急増を背景に、法律や福祉サービスの流れが大きく変わってきています。今後の暮らしの支援をどう方向付けしていくか、法人内で話し合いを続けています。話し合いでは、ついつい閉塞していく現実にとらわれ、「何のため」という原点を見落としてしまうことがあります。



今一度、「拓く」の歩みをまとめた本のタイトルにもなった原点『あたりまえに地域で暮らしたい』から考えはじめる必要があると感じ、

先日のスタッフ会議で『あたりまえに地域で暮らすとは？』をテーマとしてグループ討議しました。「昼は働き、夜は寝る(メリハリがある生活)」「やりたいことが自由にできる(管理されない)」「選択できる・そのための様々な経験がある」「帰る家がある(家族が待っている)」「役割がある」「仲間がいる」など各グループから様々な意見が出ました。障がいがあるなしに関わらず、誰にとっても大切なものばかりでした。

テーマを変え『グループホーム(GH)で実現するには？』で討議。「共同生活の場だから、自由に選択できる場面が限られる…」など歯切れの悪い意見が多くありました。一方では、「制約はあるものの、どうしたらできるかを考え続けることが大切」との意見もありました。原点から暮らしの支援を考えると、GHで暮らすことは全体の一部であり、様々な経験を通じて力をつけたり、選択肢を広げたり、家族や地域とのつながり(コミュニティ)をつくっていくことなど、暮らしの支援は多様であることに気付かされます。

今、暮らしの場は、サテライト型住居やシェアハウス、コレクティブハウスなど、どんどんニーズに合わせて多様化しています。「高齢になった保護者も一緒に住めるといいね」「支援者じゃなくても、障がいがある人が同居する人を支えられる、逆もある・そんな支援が循環するのもいいね」「地域に共同介護ができる住宅ができたらいいいね」など、ニーズは何なのか。法律や福祉サービスの視点からではなく、「誰とどう生きていくか」。もう一度、大切にしていくものが何なのかを議論し直す必要があるのではないのでしょうか。ご本人・ご家族とも一緒に考えていきたいと思えます。

(地域生活支援課 課長 浦川 直人)

グループホームについて話そう

議論を重ね、次の時代を目指したい

私は、障がいがあっても地域の中で当たり前暮らしそうとスタートしたグループホーム（GH）の暮らしを応援したいと、GH「御井あんだんて」の運営に携わって今年で7年目に入ります。

7年前、高校生のみんながこれからどう成長し、どんな人生を歩んでいくか、大事な時に関われることに期待と不安でいっぱいでした。最初は不安で一人で寝ることができなかったみんなも、今では親元を離れたホームでの生活にすっかり慣れました。地域の人たちとも仲良くなり、それぞれがしっかりと存在感を放っています。自宅以外で寝る、日中は働きに出る、自分の部屋で好きな時間を過ごすなど、私たちにとって何気ないことができるようになり、とても成長したと実感しています。



昨年9月からは一人の入居者が自分らしく暮らしたいとホームを出て一人暮らし（サテライト）にチャレンジし、その応援をしています。まだ5ヶ月ですが、心配する支援者の思いをはねのけて自分らしい暮らしを楽しんでいるようです。その姿を見ていると、支援者側がついミスが無いように守り、整えることばかりにとらわれてしまい、彼の持つ力が見えなくなっていたことに気づかされました。守られすぎた中では発揮することのなかった力に気づきましたし、また、力を十分に発揮して自分らしく暮らすためには、見守る地域の大切さも改めて感じています。



誰にとっても「たった一度きりの人生」。もっと色々なチャレンジ（経験）を積み重ね、ご本人の力を発揮しながら自分らしい暮らしを見つけてほしいと思っています。

グループホーム制度が移り変わる中で、誰もが幸せに自分らしい暮らしを続けるには、何が必要かみんな議論を始めていかないといけない時期に来ていると思います。これからも知恵を出し合い、議論を重ねながらそれぞれの暮らしを応援したいと思います。

（御井あんだんて 世話人 森田 さかえ）

新理事・評議員のご紹介

平成28年1月26日までの任期となっていた理事・監事及び評議員が、改選により下表のとおりとなりました。尚、今期については、平成29年4月に予定されている社会福祉法等の一部を改正する法律の施行に対応できるよう、任期を平成29年3月31日までの期間とすると共に、理事と評議員を兼任しないなど現時点で可能な範囲での変更を行っています。 (担当 野瀬 美紀)

理事名	所属等
野田 文子	社会福祉法人拓く
馬場 篤子	社会福祉法人拓く
野田 政氏	(株)エルピア代表取締役
國友 淑子	福岡県社会福祉士会
北岡 さとみ	社会福祉法人拓く
野瀬 美紀	社会福祉法人拓く
浦川 直人	社会福祉法人拓く
田中 敬子	オフィスケイ代表
森田 さかえ	社会福祉法人拓く
馬場 活嘉	新古賀病院 消化器外科医師

監事	所属
井上 壽一	井上壽一税理士事務所
川崎 和子	(福)新世会 理事長

評議員	所属等
櫻木 京子	社会福祉法人拓く 元理事長
高田 次雄	社会福祉法人拓く
和泉 光信	(株)和泉プロパン 代表取締役
古賀 敏久	古賀敏久税理事務所 所長

評議員	所属等
鳥巢 俊昭	(財)医療・介護・教育研究財団 常務理事
中園 英俊	元 福岡法務局所長
宮崎 真澄	中学校教員
田中 憲次	田中電業(株) 代表取締役
坂本 明子	(学)久留米大学文学部 社会福祉学科准教授
松下 航	のぞえ「風と虹」センター長
西村 郁子	NPO法人久留米市 手をつなぐ育成会 代表理事
石橋 康秀	久留米市教育委員会教職員課長
石橋 裕子	NPO法人佐賀県放課後児童クラブ 連絡会理事長
古村 美津代	久留米大学医学部看護学科准教授
筒井 博文	でてこんの事務局長
友廣 道雄	共同生活介護すてっぷ 管理者
福島 龍三郎	ライフサポートはる 理事長
緒方 麻美	安武校区コミュニティセンター
園田 直嗣	大牟田高校 教諭
入部 祥子	社会福祉法人こぐま福祉会 総合支援部部長

順不同、敬称略

第14回 ポレポレ祭り 報告

第14回ポレポレ祭りへのご支援ご協力有難うございました。多くの方のご支援のおかげで、盛況のうちに終えることが出来ました。『でてこんの☆まざりあおう』というテーマのもと、釣り堀という新しいイベントも企画するなど、みんなで楽しめる祭りとなるよう努力しました。

今回も東北の被災地から浪江焼きそば隊、ご当地ヒーロー「相双神旗(そうそうしんき)ディネード」もお越しいただき、被災地への思いを伝えていただきました。今後も、多くの方々に参加してよかったと思っただけのように努力します。収益金につきましては、今後必要な時の為に特別積立金といたします。今後ともご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。(担当 権藤 好子)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
広告・協賛	2,153,000	消耗品費	193,856
バザー売上	1,990,456	通信・印刷・パンフレット代	377,205
東北売上	93,900	バザー材料費	1,175,717
ガレージ売上	460,786	東北仕入れ費	134,850
学校交流売上	44,141	材料費	15,412
手作り作品他売上	109,412	ステージ設備費	468,308
その他	48,553	その他	932,713
収入合計 ①	4,900,248	支出合計②	3,298,061
第14回収支差額		繰越金	
項目	金額	第13回まで	1,944,237
収支差額①-②	1,602,187	第14回	1,602,187
		合計	3,546,424

「パン工房ポレポレ」の工賃アップに向けて 若い力でやったるぜ！

2001年、「出会いの場ポレポレ」が開所したと同時に、「パン工房ポレポレ」がオープンしました。当時は、利用者さん、職員、保護者のみなんで取り組み、多くの方々のご協力のお蔭で、「ポレポレのパン」として評判になり、売上げもたくさんありました。しかし、10年以上を経た今、外での販売や学童の注文パンなどが少なくなり、売上げが減少してきました。現状はパン工房の職人1人だけで作るという体制の中、生産量も種類も増えない。新しい商品を考える余裕もなく時間だけが過ぎたまま、昔のようにみんなで商品を考えたり、販売をしたりすることがなくなってきていました。

「パン工房ポレポレ」の売上げは、利用者さんの工賃になります。生活する中で、外食するにも旅行など楽しいことをするにも、お金は必要になってきます。しかし、年金だけではそれを叶えるのも難しいのが現状です。利用者さんにとって、工賃はとても大切な収入なのです。一度は工賃を下げようと思ったこともありました。しかし、職員が集まり、今後どうしようかという話し合いをした時に、『工賃をもっと払っていきたい！』『ボーナスを出したい』という意見がたくさん。みんなでもう一度、工賃アップができるよう頑張ろうと決意しました。

まず、作業場を確保しようと食堂の和室を改装し、パンが作れるようにしました。他にも、「売上げをあげるなら営業チームが必要でしょ」というアドバイスから、日中活動の中に新たに「営業チーム」を結成し、利用者さんと一緒にビシッと背広



を来て、毎日10カ所ほどの企業や施設に営業で回っています。ただ、注文をいただけるのは一日で1件くらいです。それでも、利用者さんも職員も営業で回るのは「楽しい」、取れなかったら「悔しい」「明日は5件取ってきてやろう」と気持ちが盛り上がっています。僕も売れる新商品を開発しなければと、うかうかしてはいられません。今、「そら豆パン」の開発をしています。

若い力で、いきいきと前向きにどんどんやっていくことが、工賃アップに繋がっていくと確信しています。

若い力でやったるぜ！

(担当 小川真太郎)



【試作中のそら豆パン】

始まりました！地域で子育て「やすたけ子ども食堂」

貧困を含めた現在の子ども達の現状を知りたい

国内で貧困状態にある子どもが、実に6人に1人とされる中、全国的に広がっているのが、子ども達に無料又は格安で食事を提供する『こども食堂』という活動です。これまで法人としてパン教室や学校交流などで子ども達と関わってきたのですが、貧困状態にある子どもがいるという点には気づきませんでした。



安武町でも、12月26日（第1回）、1月16日（第2回）に安武コミュニティーセンターで『やすたけこども食堂』が開催されました。試行錯誤の段階ですが、仲澄江さんを会長、三原圭子さんを副会長と

し地域の有志の方による運営委員会（第1回目の食事）を開き、「ピザ窯を作りたい」「色々な所でバーベキューをしたら」など自由な発想で今後の展開を模索しています。材料はJAくろめ安武農産物直売所「そらまめ」や地域の皆さんが持ち寄った物を使用し、無料ではなくお金の価値を知ってほしいという想いから料金は100円にしています。

第1回はハム野菜炒めをメインに6品を20食、第2回は手羽元煮をメインに7品を60食提供しました。驚いたのが、その食の細さです。よく見ると自分が子どもの頃にいた「肥満傾向児」がほとんどおらず、痩せた子どもが多かったように思います。配膳の際にいっぱい食べてもらおうと、多めについでいたのですが、大半の子どもが残っていました。中にはほとんど手もつけずに残している子も多くいました。好き嫌いなのか、元々それ位しか食べられないのかまだ理由はわかりませんが、今後この活動を続けていく中で理解していくことで、貧困を含めた現在の子ども達の現状を知りたいと思いました。



（第2回開催風景）

また、お手伝いをさせていただいている子育て世代の親の方たち、地域のおばちゃんたちが混ざり合い、「これはどうやって作るのですか」「こんな物も手作り出来るんですね」と、異世代の交流が生まれていました。今後、料理を作る人は子育て世代や仕事の現役世代、それを卒業した世代、そして学生に広がっていくことで、文化や想いの継承ができればと思いますし、子ども達は様々な事情を抱えていても分け隔てなく、「食」というツールから地域の仲間としての支えあいを小さい頃から学んでいく手伝いが出来ればと思います。

（担当 前田 力哉）

「安武そら豆復興作戦」を進めています ただ今、越冬中！2月より予約販売を始めます

2015年の秋、ポレポレ農園（安武町）の畑に定植したそら豆が日に日に大きくなっています。12月より寒さから守るためにビニールトンネルを張り、毎日、職員は気温を確認して畑に出かけ、温度が上がればビニールを開け、夕方に閉めます。現在、ビニールをめくるとそら豆は青々とした葉を広げ、淡い紫色の蝶のような花が咲いています。

農業は天候次第です。「今年は、開花が早いです」と職員。気温の変動を敏感に感じるデリケートなそら豆たちです。これからの作業は、ビニールの開閉と脇芽摘み、花摘み。一節に花粒が5本咲きますので、そのうちの3本を摘み取ります。ていねいに、ていねいに育て、最後には一節に1本の莢（さや）とします。これが大きな莢にするための大切な作業です。



収穫は4月中旬から5月の予定。毎年、大勢の皆さんが、当法人のそら豆を楽しみにしておられます。おいしい旬の味覚をお客様にお届けできるように頑張ります。

■「安武そら豆復興作戦」とは？

安武町は、昔からそら豆の産地でした。安武そら豆の特徴は、大粒でつやつや、ほくほく。大半の農家が田の隅に1～2aほどを栽培し、ご飯のおかず、おやつとして食べていました。現在、市場に出荷する農家は数軒です。

そこで、2011年より当法人は、「安武そら豆復興作戦」を実施しています。「安武地区の農業振興のため、お役に立ちたい」。その一心で、土に向かい、チャレンジをしています。

■2月より予約販売いたします



2月より予約販売申込書を配布いたします。

HPでも、随時、ご案内します。

1箱（2kg）・2,500円
（税込・送料別）

藤吉剛さんは今、「三原さん家」であたりまえに暮らしています。ローマは一日にして成らず。



2016年の今、藤吉剛さんは「三原さん家」で多くの地域の方々と関わりながら、暮らし始めています。安武地区は障がい者や高齢者を支える地域に少しずつなっけてきています。ここに至るには35年にわたる歴史がありました。まさに、「ローマは1日にして成らず」です。

1月、書籍『あたりまえに地域で暮らししたい』を刊行しました。その中で詳細はご紹介していますが、剛さんは安武保育園で地域の子どもたちと育ちました。しかし、障がいが重いので、養護学校(当時)に行くのが「あたりまえ」と誰もが思い、安武小学校に入学することはできませんでした。お母さんは「ここでずっと暮らすのだから、兄妹と一緒に安武小に通わせたい」と強く思い、共感した教

師たちが合宿などをして意思を固め、取り組みを始めます。ついに小学4年の時、安武小の普通学級に転校しました。小学校もご家族も、そしてご本人も地域の受け皿としてはまだ不十分でしたので、苦難の道だったと思います。こうして、剛さんの転校をきっかけに「共に生き、共に学ぶ」という考えが広がり、少しずつ久留米市では障がい児が地域の学校で学ぶことができるようになっていきました。

一方、どんなに障がいが重くても、卒業後、地域で暮らしてほしいという保護者や教員の願いから「夢工房」「共に生きる場JAMBO」「福祉の店アサンテ」の共同作業所が誕生。そして2001年、「出会いの場ポレポレ」が安武地区に。以来、様々な催しを行うことで地域の方々とは混ざり合い、少しずつ「安武住民」として溶け込んでいきました。今では、障がい者だけが集まるのが「あたりまえ」が、誰とも混ざり合って暮らすのが「あたりまえ」になってきました。そして、若い職員が「安武移住」をし、地域づくりの若き担い手に。何事も長年の積み重ねがあって初めて成し遂げることができるものだと痛感しています。(常務理事 馬場篤子)

書籍「あたりまえに地域で暮らしたい」1月刊行

1,000円(税込) 購入申し込み先 (問) 0942-27-2039